

男女倉石器群の削片技術

－男女倉遺跡群再整理経過報告 1－

須藤隆司

資源環境と人類 第 10 号 45-54 頁 2020 年 3 月

Natural Resource Environment and Humans

No. 10. pp. 45-54. March 2020.

男女倉石器群の削片技術 －男女倉遺跡群再整理経過報告 1－

須藤隆司^{1, 2 *}

要 旨

長野県長和町教育委員会は、2014年度から信州ローム研究会が調査した男女倉遺跡群の再整理作業を開始し、明治大学黒曜石研究センターは、2017年度から同資料群の黒曜石産地解析を開始した。本報告は、その経過報告第一報としての資料提示である。

男女倉石器群分析における最重要課題は、森嶋 稔によって提唱された男女倉技法と男女倉型石器の解明である。男女倉石器群の再整理作業で知り得た最大の新知見は、最終工程と考えられていた削片剥離が、初期からの全工程で繰り返し行われていた事実である。男女倉石器群における削片技術は、機能部作出と機能部再生の技術に止まらず、両面調整石器の製作技術に組み込まれていたことが判明し、削片系両面調整技術における男女倉型技術の特性が明確化された。

古北海道半島における削片系両面調整技術の成立は、初期細石刃石器群における蘭越・美利河型技術である。蘭越・美利河型技術では、繰り返された削片剥離と器面調整によって、細石刃核としての両面体製作が行われた。古本州島の男女倉型技術においても、削片剥離と器面調整の繰り返しにより、石器としての両面体製作が行われていたことが判明し、日本列島における初期削片系両面調整技術としての男女倉型技術と蘭越・美利河型技術の同一性がより明確化された。削片系両面調整技術における細石刃製作から両面調整石器製作への技術変容は、旧大陸の細石刃製作と新大陸のクロヴィス型尖頭器製作の関係性と相同である。

キーワード：男女倉石器群、男女倉型技術、削片技術、両面調整技術、初期細石刃技術

1. はじめに

男女倉遺跡群は、本州最大の黒曜石原産地である中部山岳地帯の霧ヶ峰高原に形成された石器製作遺跡群である。信州ローム研究会は、1957年から1960年の期間で5遺跡（第Ⅰ～Ⅳ・みつけ沢地点）の発掘調査を実施し、1972年に発掘調査概要報告書「男女倉－黒曜石原産地地帯における先土器文化石器群－」を刊行した。発掘調査資料は、信州大学医学部第二解剖学教室に長らく保管されていたが、長和町教育委員会に移管されることとなった。長和町教育委員会は、2014年度から3万数千点に及ぶ石器群の再整理作業に着手し、明治大学黒曜石研究センターは、2017年度から同石器群における黒曜石産地解

析を開始した。本報告は、その経過報告第一報である。

男女倉第Ⅲ遺跡¹⁾を代表とする男女倉石器群の最重要研究課題は、男女倉技法・男女倉型石器（森嶋1975）として提唱された男女倉型技術の解明である。男女倉第Ⅲ遺跡・男女倉第Ⅰ遺跡の現在までの再整理作業により、男女倉型技術に関する新知見が得られた。本論では、その概要報告と更なる課題を提示する。要点は、両面調整技術としての削片技術である（須藤2018）。黒曜石産地解析では、男女倉谷で採取可能な和田・男女倉産原石に加えて、分水嶺を越えて獲得された諏訪産原石の特徴的なあり方が判明した（須藤2018；真島・須藤2019）。解析の詳細なデータは第二報とし、男女倉型技術に関わる原石特質の視点から原石産地の課題に一部言及する。

1 明治大学黒曜石研究センター 〒386-0601 長野県小県郡長和町大門3670-8

2 長野県長和町教育委員会 〒386-0602 長野県小県郡長和町古町4247-1

* 責任著者：須藤隆司（sutou@mwbiglobe.ne.jp）

2. 男女倉技法と大平山元A技法の検討課題

まずここで、従来の男女倉技法の定義について本論での検討課題を確認する。森嶋（1975, 1978）が提唱した男女倉技法では、第1工程で、尖頭器状の素形器体を製作し、第2工程で、断面がシメトリカルな形態（Bタイプ）を整形し、第3工程で、先端部から側縁にエッジがより薄くなるように鋭角な槌状剥離を施し、槌状剥離の先端と末端を細部調整で整形した男女倉型ナイフ形石器と、なるべく直角な槌状剥離で男女倉型彫刻刀形石器が製作された。男女倉技法とは、「尖頭器状の素形器体的な素材をまず製作し、それを出発点として、更に第三次加工としての調整打を加えて合目的的な石器を製作するという技法」（森嶋1978）であった。ここで検討する課題は、第1工程の出発点とされた尖頭器状の素材器体製作と第2工程の断面シメトリカルな形態整形についてである。

三宅（1980, 1981）が提唱した大平山元技法Aでは、第1工程で大形の両面加工尖頭器を用意し、第2工程で目的剥片としての扇形第1次削片を剥離する。第3工程で槌状剥離面両面を再調整し、再び尖頭状に仕上げ、第4工程で目的剥片としての扇形第2次削片を剥離する。第5工程は、第3工程と第4工程を繰り返して、素材がある一定の大きさに達した段階、扇形削片を必要数剥離した後で、尖頭器・彫器を製作する。第5工程の尖頭器製作では、槌状剥離面両面の再調整は行わず、鋭い先端部が整形された。大平山元技法Aとは、「大形の両面加工尖頭器から目的剥片としての扇形削片を連続的に剥離した後、更にもう一つの目的とする石器（尖頭器ないし彫器のいずれか）をも製作する技法」（三宅1980）であった。ここで検討する課題は、繰り返された削片剥離の目的を扇形削片製作とした点であり、男女倉技法と同様に大形両面加工尖頭器を素材とした点である。

3. 男女倉石器群の削片技術

3-1. 削片はいつ剥離されるか

男女倉第Ⅲ遺跡は、男女倉型石器の大規模な製作遺跡であり、製作工程を示す両面体は500点規模に及ぶ。その詳細は今後の経過報告・本報告とし、第Ⅰ遺跡の資料を含めて図示した図1・2の資料を基準に、男女倉技法を男女倉型削片系両面調整技術として再構築するための新視点を提示する。

素材は、扁平な板状原石を基本とする。黒曜石産地は、図1.1・5・8が和田産、図1.2～4・7・2.3・8・9が男女倉産、図1.6・2.1・2・4～7・10が諏訪産である。男女倉型石器の素材として最適な諏訪（星ヶ塔・星ヶ台）産の板状原石は、剥離面に類似した平坦な礫面から構成されている。露頭から剥落した板状角礫の選択的採取であり、男女倉型石器製作における諏訪産原石獲得行動の意義を見出すことができる。男女倉産は、男女倉谷南域のブドウ沢・本沢・ツチャ沢を産地（隅田・土屋2016）とする平坦な礫面からなる良質板状原石である。和田産板状原石には、東餅屋・鷹山産河川礫（図1.1・8）と分水嶺を越えた和田峠南産（隅田・土屋2016）の崖錐礫と考えられる資料（図1.5）がある。

製作第1工程として、板状原石の礫面に施された削片剥離が図1.1～4・6に観察される。図示はないが、礫面と削片面のみの資料も少なからず確認されている。図1.1は、削片面を打面とした器面平坦調整の初期工程を示す資料である。端部折損で礫面が広く残存する。この削片剥離と器面調整のあり方は、美利河型細石刃技術（須藤2009）と同質である。図1.2では、裏面と表面右側で器面平坦調整を行った後に、先端形成の削片剥離が行われている。削片剥離は端部に達し、表面に礫面を広く残している。図1.3では、表面右側に急角度調整、裏面の礫面で2回の削片剥離が行われている。図1.4では、左右の切り立った礫面を打面とした裏面平坦調整、表面中央での石刃状並列削片剥離が行われている。削片剥離の打面部における裏面平坦調整は節理面による階段状剥離となり、端部は折損している。図1.1・4

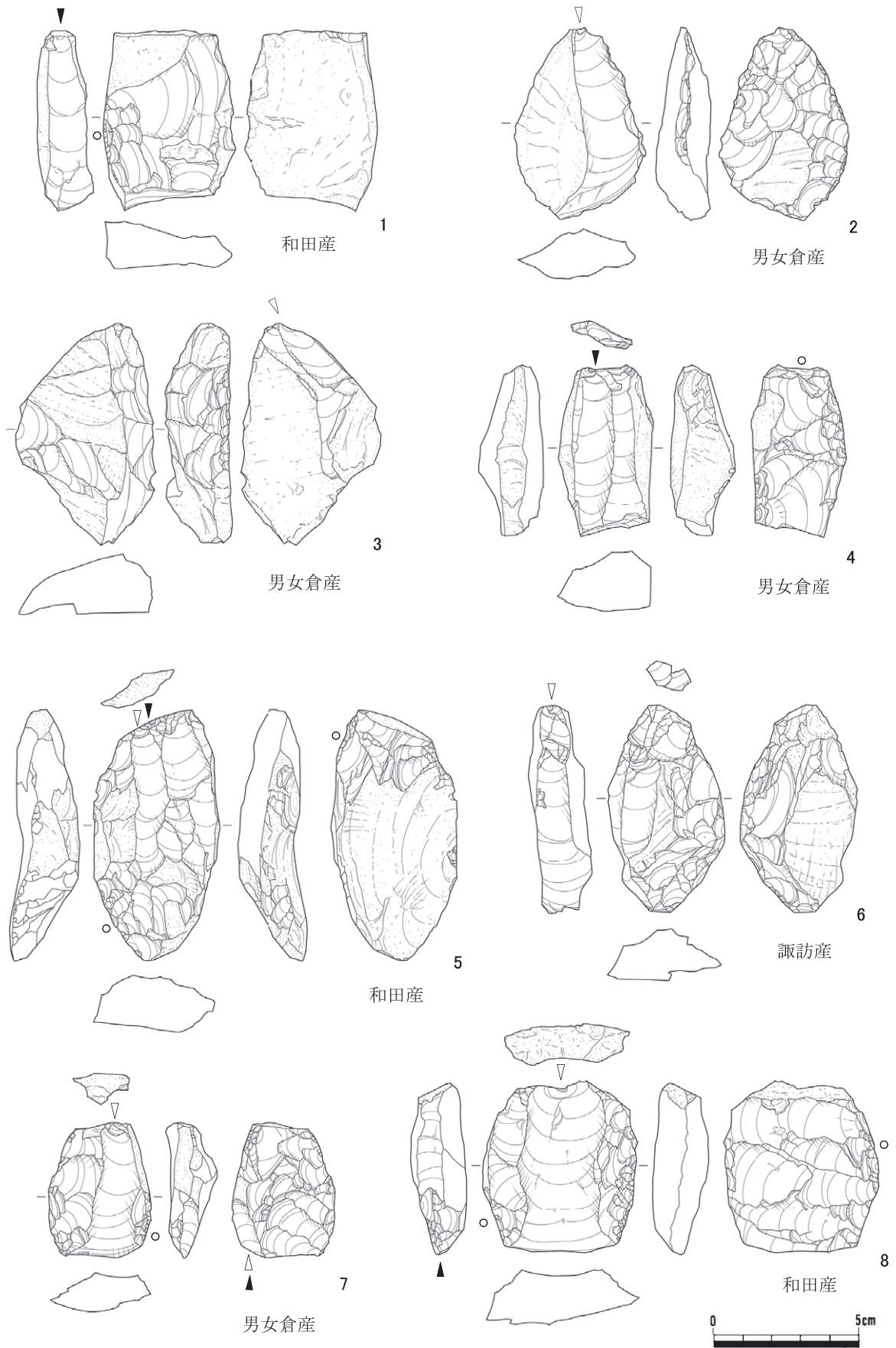


図1 男女倉石器群（第Ⅲ遺跡）の削片技術
 (▽礫面・調整面を切る削片剥離, ▼調整面に切られた削片剥離, ○削片面を切る調整面)

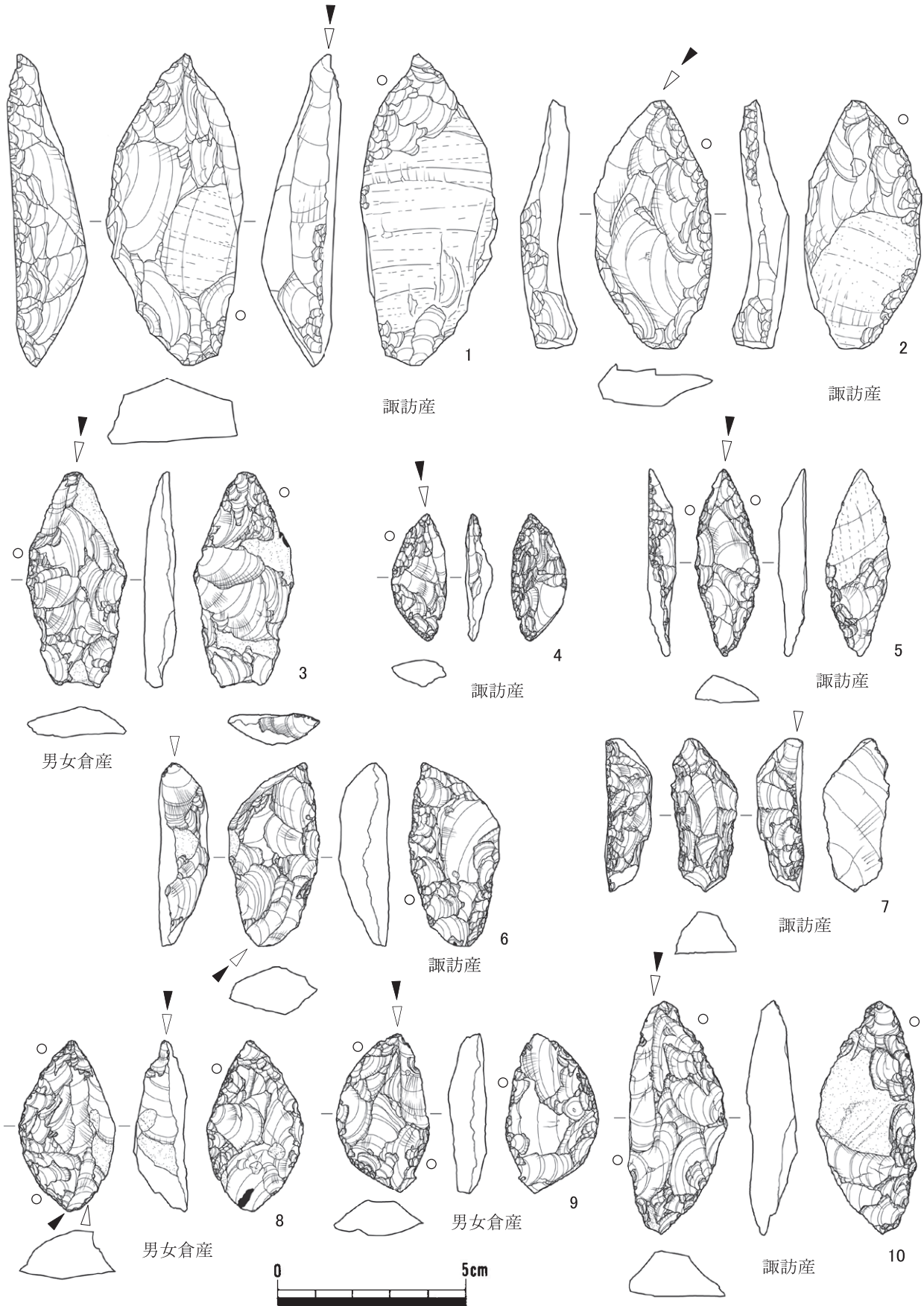


図2 男女倉石器群（第Ⅰ・Ⅱ遺跡）の削片技術
 (▽礫面・調整面を切る削片剥離, ▼調整面に切られた削片剥離, ○削片面を切る調整面)

の端部折損は、先端部形成過程と考えられようか。図 1. 6 では、右側表裏面を主体に端部が階段状となった平坦調整が行われ、表面左側は石刃状削片剥離と下端の表裏調整面を取り去った削片剥離が行われている。表裏面には平坦な礫面が残されている。削片面は端部に達し製作不成功品と考えられるが、急角度な削片面縁辺には部分的に微細剥離が観察される。

削片剥離と器面調整の繰り返しによる石器製作進行が多くの資料で観察されている。図 1. 5 では、表面で石刃状並列削片剥離が行われている。湾曲した裏面は、剥離による節理面割れと考えられ、右側面に末端の剥離面が見られる。裏面上部に削片面・調整面を打面とする器面平坦調整がある。表面では、左側上部の削片面に切られた平坦剥離と削片面を切る左側下縁の平坦剥離が行われている。下縁調整は、縁辺細部調整が顕著で刃部整形の状態である。図 1. 7 では、表裏面に器面平坦調整が施される。裏面下端からの削片剥離は器面調整面を切り、表面平坦調整の打面となる。表面で行われた削片剥離は、器面調整面と端部の大半を取り除いている。側縁の鋭利化の不成功品と考えられる。図 1. 8 では、表裏面に器面平坦調整が施される。対向する側縁まで達した裏面の並列平坦剥離は、左側縁下端からの削片面を打面とする。礫面を打面とした表面中央での削片剥離は、器面調整面と端部の大半を取り除く。厚さ調整の不成功品と考えられる。

図 2. 1 は、表面左側が先端側の平坦調整と基部側の急角度調整であり、縁辺の細部調整は刃部整形の状態である。表面右側は、先端側の削片面に切られる平坦調整と基部側の削片面を切る急角度調整である。裏面先端側では、削片面を打面とした器面平坦調整が行われている。削片面縁辺には、微細剥離が連続しており使用痕跡の可能性がある。図 2. 2 は、表面左側に削片剥離に切られた急角度調整があり、表面右側は、削片剥離に切られた平坦調整と削片面を切る器面平坦調整である。裏面先端側では、削片面を打面とする器面平坦調整が行われている。平坦調整は裏面に対向する側縁に達し、切り立った右側面（剥離面状の礫面）を打面とする表面では階段状剥離を呈する。図 2. 3 は、表面が削片剥離に切られた調整面と削片面の先端と端部に施された整形面で構成さ

れ、裏面先端の器面平坦調整は削片面を打面とする。基部端部は表面からの急角度調整である。

図 2. 4 は、表面右側が削片面と削片剥離に切られた平坦調整で、表面左側は削片面を切る整形調整である。裏面左側の平坦調整は、削片面以前の調整面を打面とする階段状剥離である。図 2. 5 は、表面が削片面に切られた初期平坦調整と削片面を切る最終尖頭部整形調整であり、裏面は尖基整形の器面平坦調整である。図 2. 6 は、表裏面が器面平坦調整であり、上方の削片剥離は最終剥離で、急角度な縁辺に微細剥離痕が観察される。裏面左側下端縁辺の最終剥離は、下方の削片面を打面とする細部調整である。図 2. 7 は、急角度の鋸歯状調整により両側縁が整形され、縁辺に微細剥離が連続し、刃部整形が指摘できる。右側縁上部で刃部再生と考えられる削片剥離が行われている。図 2. 1・2・5 の裏面には、諏訪産原石の剥離面に類似した礫面が広く残されている。図 2. 7 の裏面も同等な礫面と考えられる。

図 2. 8～10 は、第 I 遺跡の資料である。図 2. 8 は、表面左側の細部調整が上下の削片面を切る最終整形剥離であり、裏面先端左側の器面平坦調整は削片面を打面とする。先端側の削片剥離は、礫面を剥離した初期段階に行われている。図 2. 9・10 は、表面平坦調整後の削片面が最終細部調整で整形されている。削片面を打面とした裏面調整が行われ、削片面縁辺には微細剥離痕が観察される。図 2. 9 の基部には表面平坦調整の打面として用いられた切り立った礫面が残されている。

3-2. 両面調整技術としての削片技術

男女倉技法・大平山元技法 A で提唱された削片技術は、両面調整尖頭器を素材とすることが前提とされていた。しかし、上記の資料から明らかにした男女倉石器群の削片技術は、両面調整石器製作技術に組み込まれ、第 1 工程から運用されていた。素材は板状原石であり、側面の平坦な礫面は器面調整の打面とされ、側面の打面形成に削片剥離が用いられた。鋭利な側縁を形成するための打面部形成として原石側面の稜線部を取り去る削片剥離が行われ、厚さを減じるために原石表面での削片剥離が行われた。それらの削片剥離は、製作進行において器面平坦調整とともに繰り返され、削片面と器面調整面の切り

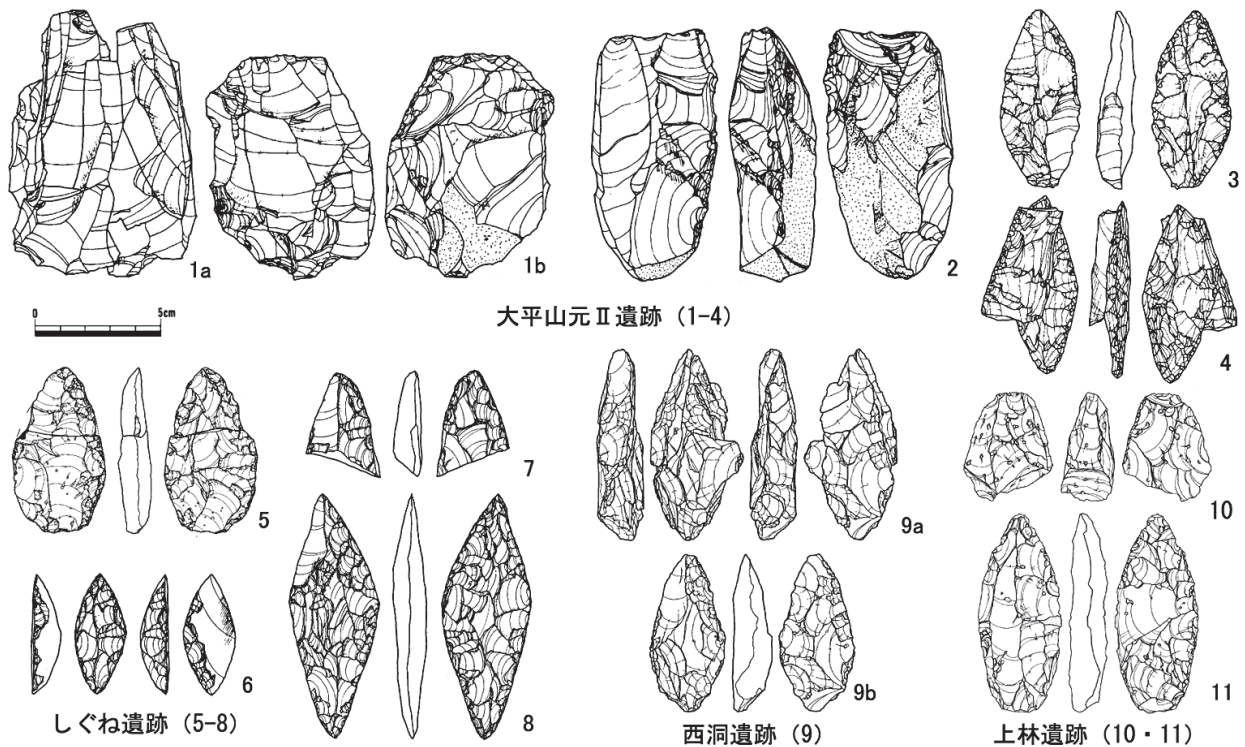


図3 男女倉石器群（古本州島東北地域）の削片技術

合い関係は多様で、削片剥離による器面調整は、上下方向・表裏面・側面と多様な位置で運用された。男女倉石器群で明らかにされた削片技術の特性とは、両面調整（器体整形）技術に組み込まれていた削片技術である。その特徴的な製作技術を改めて男女倉型削片系両面調整技術（略称男女倉型技術）として提唱する。

大平山元技法Aでは、削片剥離と器面調整の繰り返しによる器体整形の進行が指摘されていた。しかしながら、そこで強調されたのは扇形削片の目的製作であり、器体整形は副次的な評価であった。削片剥離は、器体の扁平化と共に薄形で鋭利な側縁を有する剥片（石刃）を製作した。確かに、削片の選択的使用²⁾は否定できず、目的剥片製作として組み込まれていた点は評価できるが、器体整形に主目的が存在した事実も強調されなければならない。

男女倉技法・大平山元技法Aの最終工程である削片剥離による機能部形成は明確な事実である。問題は、なぜ最終的な機能部作出として削片剥離を用いたか、ということである。この点は須藤（2005, 2014）で指摘したように、男女倉石器群における両面調整技術は、器体の扁

平化・側縁の鋭利化が未発達な段階にあったためと考えられる。図示した資料が示すように、男女倉石器群の器面調整は、対向する側縁に及ぶものや階段状剥離が多く制御が不十分である。断面形は、裏面が扁平で甲高なD字形を呈して、シンメトリカルな形態は製作されていない。「尖頭器としての機能を満足させるに足り得る器体となるのにもかかわらず、更に一辺に一打を入れてより鋭角で、プライマリーな刃部に近いものを、わざわざ製作」（森嶋1978）したのではなく、機能を満足させるに足り得る器体とできなかったために、鋭利な機能部作出のために削片剥離を用いたのである。

図3で関連資料の一部を概観してみよう。図3. 1～4は、青森県大平山元Ⅱ遺跡（青森県郷土館1980）の資料である。図3. 1・2は、大平山元技法との関連が指摘されたⅡ下層石核第1類（三宅1980）の資料である。図3. 1 a bの接合資料とその石核は、器面調整と削片（石刃）剥離の繰り返しで、器体の両面体化を示す資料である。図3. 2の石核とされた資料では、礫面を広く残した段階での削片剥離と器面調整が観察でき、男女倉型石器の初期工程品と理解することが可能である。図

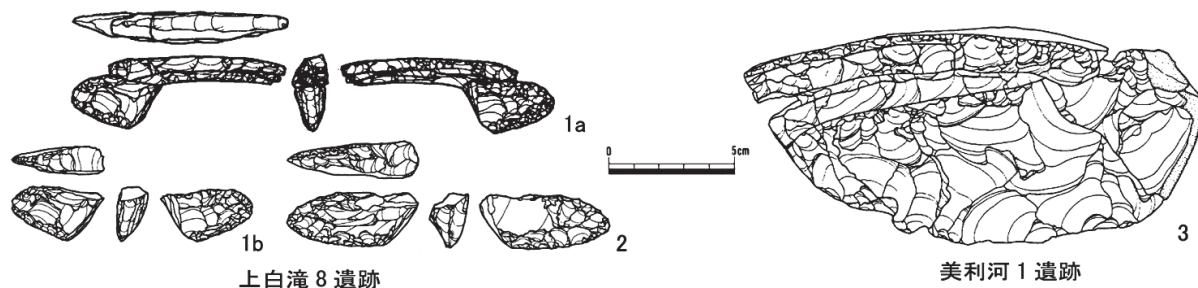


図4 初期細石刃技術（古北海道半島）の削片技術

3. 3は、上下方向の削片剥離、先端側の削片面を打面とした裏面調整など、製作途上における削片剥離のあり方を示す資料である。図3. 4は、大形削片と小形化した両面調整石器の接合例で、削片剥離後に器面調整が繰り返されたことがうかがえる。

図3. 5～8は、男女倉石器群の両面調整技術としての削片技術を明示する新潟県しぐね遺跡（津南町教育委員会2019）の資料である。図3. 6・8は、青灰色の帯状部分を特徴とする黒曜石で、男女倉産原石の可能性が高く、男女倉遺跡群を製作地点としていた可能性がある。図3. 6の裏面は、剥離面ではなく平坦な礫面と考えられ、板状原石素材が想定される。図3. 5の表面には、器面調整の中央部を抜く削片剥離が残されている。図3. 7・8には、削片面を打面とする裏面調整があり、図3. 6では、削片面への調整で先端部が整形されている。図3. 8では、削片面先端で graving, cutting, sowing の使用痕跡と稜線や器面で運搬痕跡が確認されている（沢田2019）。

図3. 9は、静岡県西洞遺跡（静岡県埋蔵文化財センター2012）の資料であり、ガラス質黒色安山岩を石材とした男女倉型石器の製作工程を示す接合例である。削片剥離と器面調整の繰り返しが観察できる。

図3. 10・11は、栃木県上林遺跡（佐野市教育委員会2004）の高原山産黒曜石を石材とする資料である。図3. 10では、削片面からの器面調整と運搬痕跡が観察され、図3. 11では、器体中央で行われた削片剥離が観察できる。

以上、男女倉石器群で確認された両面調整技術に組み込まれていた多様な削片技術を、東北日本の広域で展開した削片系両面調整石器群（須藤2014）で確認することができる。

3-3. 古北海道半島の初期細石刃技術との技術的同一性

三宅（1981）は、大平山元技法と湧別技法の類似点を指摘した。その課題は、古北海道半島における初期細石刃石器群の発見により、男女倉型技術と蘭越・美利河型技術の関係性として再浮上した（須藤2005, 2009, 2014, 2017, 2018）。蘭越・美利河型細石刃技術の特質は、削片剥離と器面調整を繰り返すことによって細石刃核を両面体化することである（須藤2009）。図4の接合資料と細石刃核は、北海道美利河1遺跡（北海道埋蔵文化財センター1985）の美利河型技術と北海道上白滝8遺跡（北海道埋蔵文化財センター2003）の美利河（峠下1類）型技術を示す。両面体化された素材に削片剥離を施すのではなく、繰り返される削片剥離に付随した器面調整の繰り返しにより、細石刃核が両面体化していく状況が確認できる。この両面調整技術に組み込まれた削片剥離のあり方は、本報告で明示した男女倉型技術と同一である。古北海道半島における両面調整石器の確立は、白滝型細石刃技術であり、古本州島の神子柴型両面調整技術に対応する（須藤2009）。男女倉型技術と蘭越・美利河型技術は、両面調整技術の試行段階と評価される（須藤2005, 2009）。

扇形剥片製作を目的とする大平山元技法Aにおいて、「残核が尖頭器や彫器を製作する素材」（三宅1981）と指摘されたが、男女倉型技術と蘭越・美利河型技術の差は、残核的な位置にある両面体を石器とするか細石刃核とするかである。蘭越型技術複合に組み込まれた石刃技術（須藤2017）は、有機質ハンマーの直接打撃による薄形石刃剥離であり、石刃技術の後に細石刃製作を目的とした削片系両面調整技術に移行する。男女倉型技術の削片剥離

初期工程には、薄形石刃剥離と同質な工程が存在し、この点を重視すれば、蘭越型技術との同一性が指摘できる。蘭越型技術成立期の較正年代は、26-25.5ka cal BP（直江2014）であり、福島県赤柴遺跡で示された男女倉型技術成立期の較正年代は、24ka cal BP（福島県文化振興財団2014）である³⁾。古本州島の男女倉型技術の成立は、古北海道半島の初期細石刃技術を起源としていると考えられる。

4. おわりに

男女倉型技術で製作された石器は、「刃部を更新できる器体」（森嶋1975）であり、「男女倉技法が提起するものは、むしろ尖頭器状石器の多様化である」（森嶋1978）。図1・2の資料提示で、製作工程における削片技術の多様性と削片技術による機能部作出の多様性を素描したが、製作工程で繰り返される削片技術と使用過程で繰り返される削片技術の具体的な追及は、今後の整理作業における更なる課題である。沢田（2019）で示された使用痕分析では、男女倉型石器の工具使用が示唆された⁴⁾。男女倉型石器の機能的・形態的多様性（須藤2014）の解明は、使用痕分析を組み入れた今後の整理作業の課題としたい。

2.5万年前の寒冷イベント（田村2017）を契機として、古北海道半島に成立した初期細石刃技術と古本州島東北地域で成立した男女倉型技術の技術的同一性は、剥離具革新⁵⁾とともに、時期は後続するが、新大陸における削片系両面調整石器（クロヴィス型尖頭器）の成立課題（高倉2015）と関係性を有すると予測される。こうした意味からも、男女倉型削片系両面調整技術の解明は、地域の資源環境によって多様な石器群を成立させた日本列島の石器技術複合革新において、極めて重要な位置を占めるのである。

謝 辞

本報告は、長和町教育委員会で行っている再整理作業の経過報告であり、大竹幸恵氏・太田光晴氏をはじめとする長和町教育委員会の皆様には全面的に協力を得ている。津南町教育委員会の佐藤雅一氏には、しぐね遺跡の資料調査でご配慮

をいただいた。明治大学博物館の島田和高氏には英文要旨をお願いした。記して感謝申し上げます。

註

- 1) 長和町教育委員会は、男女倉遺跡群の分布調査を実施し、遺跡の範囲と名称の再整理を行っている。信州ローム研究会調査の第Ⅰ～Ⅳ地点・みつけ沢地点は、第Ⅰ～Ⅴ遺跡とされた。
- 2) 削片利用の解明は今後の課題であるが、一部の資料では使用痕跡が確認されている（村田2018）。
- 3) 伊藤（2018, 2019）は、砂川石器群（成立期23.5ka cal BP）以前に成立した男女倉石器群の武蔵野台地における層位的位置を明示した。
- 4) 沢田（2019）は、しぐね遺跡の削片面のある先端部細片（津南町教育委員会2019、第27図2）を衝撃剥離と理解したが、先端部には礫面が広く残されており、削片剥離・先端調整の失敗品と考えた方が妥当と思われる。
- 5) 国府石器群の影響が男女倉石器群の成立に関わるという見解（安斎2004）が提示されているが、国府石器群の剥離具は硬質石ハンマーで、軟質石ハンマー、更には有機質ハンマーが検討される男女倉石器群とは明らかに異なる。

引用文献

- 青森県立郷土館 1980『大平山元Ⅱ遺跡発掘調査報告書』、114p., 青森
- 安斎正人 2004「東北日本における「国府系石器群」の展開－槍先形尖頭器石器群の前提－」『考古学』Ⅰ：1-40
- 福島県文化振興財団 2014『常磐自動車道遺跡調査報告68』、368p., 福島
- 北海道埋蔵文化財センター 1985『美利河Ⅰ遺跡』、355p., 札幌
- 北海道埋蔵文化財センター 2003『白滝遺跡群Ⅳ第2分冊』、586p., 札幌
- 伊藤 健 2018「後期旧石器時代「武蔵野編年」の新地平－槌状剥離を有する尖頭器石器群をめぐる－」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』XXⅡ：27-55
- 伊藤 健 2019「槌状剥離を有する尖頭器の編年と変遷（2）」『旧石器時代文化から縄文時代文化の潮流－研究の視点－』、白石浩之編、pp.129-138、東京、六一書房
- 眞島英壽・須藤隆司 2019「非破壊蛍光X線分析による長和町男女倉遺跡群黒曜石遺物の原産地推定」『資源環境と人類』9：41-50
- 三宅徹也 1980「大平山元技法AとB」『大平山元Ⅱ遺跡発掘調査報告書』、pp.43-48、青森、青森県立郷土館
- 三宅徹也 1981「大平山元技法について」『大平山元Ⅲ遺跡発掘調査報告書』、pp.23-30、青森、青森県立郷土館
- 村田弘之 2018「男女倉遺跡群出土石器群の使用痕研究」『第20回長野県旧石器文化研究交流会シンポジウム神子柴系石器群とは何か?』、pp.20-21、長野、八ヶ岳旧石器研究グループ
- 森嶋 稔 1975「旧石器文化の中から－特に男女倉技法をめ

ぐってー」『男女倉』, pp.169-173, 長野, 和田村教育委員会

森嶋 稔 1978「男女倉技法の周辺」『中部高地の考古学』, pp.26-47, 長野, 長野県考古学会

直江康雄 2014「北海道における旧石器時代から縄文時代草創期に相当する石器群の年代と編年」『旧石器研究』10: 23-39

佐野市教育委員会 2004『上林遺跡』, 948p., 栃木

沢田 敦 2019「しぐね遺跡出土石器の顕微鏡観察－有槌尖頭器石器群における石器の機能と運搬－」『しぐね遺跡』, pp.84-102, 新潟, 津南町教育委員会

信州ローム研究会編 1972『男女倉－黒曜石原産地帯における先土器文化石器群－』, 76p., 長野

静岡県埋蔵文化財センター 2012『西洞遺跡Ⅱ』, 233p., 静岡

隅田祥光・土屋美穂 2016「長野県霧ヶ峰地域における広原遺跡群出土の黒曜石製石器の原産地解析」『長野県中部高地における先史時代人類誌－広原遺跡群第1次～第3次調査報告書－』, 小野昭・島田和高・橋詰潤・吉田明弘・公文富士夫編, pp.197-219, 長野, 明治大学黒曜石研究センター

須藤隆司 2005「杉久保型・砂川型ナイフ形石器と男女倉型有槌尖頭器－基部・側縁加工尖頭器と両面加工尖頭器の技術構造論的考察－」『考古学』Ⅲ: 73-100

須藤隆司 2009「細石刃技術－環日本海技術と地域技術の構造と組織－」『旧石器研究』5: 67-97

須藤隆司 2014「削片系両面調整石器－男女倉・東内野型有槌尖頭器の再構築－」『資源環境と人類』4: 39-56

須藤隆司 2017「古北海道半島における初期細石刃石器群と前半期石刃石器群の石刃技術－広郷型・オバルベツ型尖頭器石器群の再検討－」『旧石器時代の知恵と技術の考古学』, 安藤政雄先生古稀記念論文集刊行委員会編, pp.248-257, 東京, 雄山閣

須藤隆司 2018「男女倉遺跡群分析の新視点－第Ⅰ・Ⅲ遺跡の再整理から－」『第20回長野県旧石器文化研究交流会シンポジウム神子柴系石器群とは何か?』, pp.22-25, 長野, ハヶ岳旧石器研究グループ

高倉 純 2015「新大陸への新人の拡散－新人の拡散過程に関する比較考古学的アプローチ－」『ホモ・サピエンスと旧人3－ヒトと文化の交替劇』, 西秋良宏編, pp.65-80, 東京, 六一書房

田村 隆 2017「日本列島後期旧石器時代の新編年」『理論考古学の実践Ⅱ実践篇』, 安斎正人編, pp.55-90, 東京, 同成社

津南町教育委員会 2019『しぐね遺跡』, 105p., 新潟

図出典

図3は青森県郷土館1980・津南町教育委員会2019・静岡県埋蔵文化財センター2012・佐野市教育委員会2004の挿図, 図4は北海道埋蔵文化財センター1985, 2003の挿図で作成.

(2020年1月8日受付／2020年1月19日受理)

Spall technique of the Omegura industries : Re-examination on the Upper Palaeolithic site group of Omegura (1)

Takashi Suto^{1, 2 *}

Abstract

Nagawa Town Board of Education in Nagano Prefecture has conducted a re-examination project on the Upper Palaeolithic industries from the Omegura site group since 2014. Center for Obsidian and Lithic Studies, Meiji University has joined the project with an aim of obsidian provenance analysis since 2017. The paper reports the first result of the lithic analysis for obsidian assemblages from the Omegura industries.

Understanding of lithic technology and stone tools classified as the Omegura type has been an issue of high priority in the lithic analysis of Omegura industries. A result of the re-examination provides evidence that the spall removing is repeatedly performed during a whole manufacturing process of the Omegura type stone tools. It was originally defined that the spall removing is strictly limited to the finishing process. Thus the spall technique of the Omegura industries can be redefined as a part of the biface technology in a broad category not restricted to the finishing retouch of working edges on the Omegura type stone tools. The redefinition shows a characteristic feature of the Omegura type technology in the biface technology with spall removing.

The earliest microblade industries in association with the Rankoshi-Pirika lithic technology indicate the emergence of the biface technology with spall removing in the Palaeo-Hokkaido peninsula. In the Rankoshi-Pirika type microblade technology, bifaces used for microblade cores are manufactured by repeated remove of spalls and bifacial flaking. As the paper indicates, the Omegura industries in the Palaeo-Honshu Island also show the biface manufacturing process using repeated remove of spalls and bifacial flaking. To conclude, there is a technological correspondence between the Omegura type and the Rankoshi-Pirika type technologies in the initial stage of the biface technology with spall removing in the Japanese Islands. The relationships between lithic technologies with spall removing shown in the lithic industries of microblade and the Clovis points in the Americas is likely to have been the same transformation as the technological change from microblade manufacturing (Rankoshi-Pirika type) to bifacial tools (Omegura type) in the biface technology of the Japanese Islands.

Keywords : Omegura industry, Omegura type technology, spall technique, biface technology, initial microblade technology

(Received 8th January 2020 / Accepted 19th January 2020)

¹ Center for Obsidian and Lithic Studies, Meiji University, 3670-8 Daimon, Nagawa Town, Chiisagata Desirect, Nagano Prefecture, 386-0601, Japan

² Nagawa Board of Education, 4247-1 Furumachi, Nagawa Town, Chiisagata Desirect, Nagano Prefecture, 386-0602, Japan

* Correspondence Author: Takashi Suto (sutou@mwbiglobe.ne.jp)